

ラブコメの恋愛観

日下, みどり
九州大学比較社会文化研究院 : 教授

<https://hdl.handle.net/2324/16796>

出版情報 : 日下翠教授中国文学・漫画学著作集成. 17, pp.6-7, 1998-06. 九州大学大学教育研究センター
バージョン :
権利関係 :



ラブコメの恋愛観

くさか
目下みどり

養老孟司は『男の見方 女の見方』で、「現代の日本社会での、若い人たちの男女関係の理解は、むしろマンガを抜いては考えられないかもしれないのである。」と語る。確かに今の若者文化を理解しようと思うならば、漫画を考えに入れぬわけにはゆかないであろう。

一例として少年漫画に現れた恋愛観をとりあげ、現代の若者の恋愛の傾向を眺めてみたい。

名作ラブコメの共通点

以下に挙げた作品は、いずれも有名な少年漫画のラブ・コメディ（略してラブコメ）である。これらの作品すべてを読んだ事のある人はよほどの漫画好きに違いない。しかし、この内一つとして名前も知らないと言う人も少ないであろう（（ ）内は作者）。

1. 『翔んだカップル』（柳沢きみお）
2. 『みゆき』（あだち充）
3. 『うる星やつら』（高橋留美子）
4. 『めぞん一刻』（高橋留美子）
5. 『電影少女（ビデオガール）』（桂正和）
6. 『ああっ 女神さまっ』（藤島康介）

ここで一つクイズを出してみよう。以上の作品には大きな共通点がある。それは何だろうか？

ヒントは、主人公とヒロインとがどのようにして知り合うのかという、そのプロセスである。

そう言えばもうピンと来た人がいるかもしれない。答えは「好きな女の子が突然家にやって来る」である。

何故か突然家に来るヒロイン

主人公は努力して、彼女を口説いて家に連れて来るわけではない。女の子の方が、ある日突然家に来るのである。以上に挙げた作品について検証してみよう。

1. 不動産屋の手違いで同級生の圭と同居。
2. ある日突然義理の妹みゆきと同居することになる。
3. 突然地球に来た宇宙の美女ラムがおしかけ同居。
4. 下宿の一刻館に管理人の響子さんがやって来る。
5. 借りたビデオの中から、可愛い女の子が出てくる。
6. 電話のかけ間違いから女神さまが部屋に現われる。

この他のラブコメでも、相手の女の子は同級生という設定が多い。『きまぐれオレンジロード』『かぼちゃワイン』『ナイン』『タッチ』などがそれで、やはり努力しないでも毎日会える関係である。

女性を口説いて連れては来ない——これは何も珍しいことではない。昔から日本男性はこうだったのである。

妻をくどくノウハウは知らぬ日本人

田辺聖子はすでにこの問題についてこう述べている。

「日本の男たちには、従来、ヨメを娶る努力を必要としない歴史風土があるのだ。私は御見合いというものもなかなかいい習慣だと思うが、この風習のおかげで、日本の男たちは、すっかりナマケモノになってしまった。…もはや坐視しては妻は持てない時代となったのだ…」

と警告し、その対策として

「自分の会社の製品を売り込むときは懸命にチエをしぼり、如才なく愛嬌をふりまくが、自分自身を売り込んで、愛する女を美事、獲得するという技術は拙劣である。学校の成績を競う熱情を以て結婚相手をくどきおとす、というような、…自分の男の魅力を女にみ



小学館「うる星やつら」 高橋留美子



講談社「ああっ女神さまっ」 藤島康介

とめさせるというような、そういう能力が啓発されていない。」

と語り、努力不足を指摘している。また、もっと昔はこのようではなかったはずとも言ふ。

「日本の男だって、言い寄る能力はあるはずである。『万葉集』の男の歌をみるがいい。名もなき庶民の男たちの恋唄、ほんとに女がほろっとくるように、実に巧い口説で迫っているではないか。その末裔の日本男に、そんな能力がないはずがない。」（『乗り換えの多い旅』集英社文庫 1997年）

田辺聖子の警告は正しい。ラブコメを見ても、肝心の女の子を口説くやり方は出てこない。未だに言い寄る能力は技術不足の段階に留まっているのである。

二種類の女—「家の中の女」と「家の外の女」

これらのラブコメには、ヒロインがいきなり家に来ること以外にもう一つ、大きな共通点がある。家に来た彼女以外に、家の外にも好きになる女の子が現れ、その二人の間であれこれ悩むというものである。

例えば『みゆき』は、同級生のみゆきと義理の妹のみゆきとの間で悩む話であった。結果は初めからわかっていたとも言える。そもそも、「家の中の女」に「家の外の女」が勝てる訳はないのだから。

この「家の中の女」と「家の外の女」を、妻と愛人と言い換えれば、日本男性の昔ながらの生活パターンとなる。妻は誰かが連れてきてくれる（かつてに家にやって来る）。それ以外に色っぽい愛人も欲しい——少年の内からこんな風でどうするのだろう。まったく、

日本の恋愛文化の行く末は暗いのである。

真面目な男の子が売れ残る

ある学生にこの話をし、妻になる女性を口説くことができるかと聞くと、自信なさそうに首をかしげる。では女の子の方から好きだと言われたらどうする、と聞くと眉を顰めて、そんな女は嫌だという。では見合い結婚をしてそれで満足かという、それも嫌のようだ。もう恋愛願望がインプットされているのである。では君は一生結婚できないけど、どうする？ というと、そうですね、とショックを受けたような顔をしていた。

彼はあまりにも真面目な（というか幼い）ため、こんな問題を考えた事はないらしい。しかし、女性を自分で口説けない、見合いもいや、そのくせ恋愛だけはしたいとなると、うつ手はないではないか。それに怖いのは、必死で口説いて振られた時、真面目な子ほど思いつめてストーカーまがいの行動に走るかもしれない事である。

若者でも、恋愛に不器用な子もいるのである。こういう子には努力して自分を売り込む方法を教え、受験なみに一次志望、二次志望、三次志望に滑り止めまで用意し、駄目だった時にはあっさりあきらめるといふ、振られ方の美学も教えておいた方がいいかもしれない。

少女漫面の恋愛観

少女漫面の一つのパターンに、ドジでとりえのない平凡な女の子が、好きな男の子に「そんな君が好き」と言われてハッピーエンド、というものがある。相手の男の子が自分を好きだと言ってくれるのをひたすら待っているわけである。

彼女が突然家に来るのを待っている男の子と、白馬に乗った王子様がやって来るのを待つ女の子—両者の出会いはないだろう。未来は暗いのである。

数少ない恋愛の学習メディアであるラブコメすら、肝心の女の子の口説き方はすつとばし、楽しいつきあいだけを描いてゆく。これではチエはつかない。

恋愛とは個人と個人の、自尊心を賭けた真剣勝負である。失恋は誰でも嫌だ。だが、それを恐れては何もできない。はっきり意思表示をすること、断られたらすばやく立ち直り、次の恋の準備ができるような柔軟な態度を持つ事…。本当は大学の授業では、こんな役にたつ講義をすべきなのだろう。

（比較社会文化研究科）